

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学校自己評価						学校関係者評価			
年度目標					年度評価		実施日令和7年2月14日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	<現状> ○昨年度、卒業生の94%にあたる296名が大学に進学した。国公立大学に46名、早慶上理、GMARCHに124名が合格した。特に埼玉大学に17名が合格、既卒者から前年度に引き続き国立大学医学部医学科に1名合格し、国公立大学合格者は現浪合わせて51名となり、開校以来の結果を残した。生徒の学力は着実に伸びている。 ○PTA行事の「進学勉強会」に280名の保護者が参加した。 <課題> ○本校の課題研究型授業と大学受験を目指した授業展開のバランスが大きな課題である。また、生徒が自律した学習者となるために、教職員の探究的な学びの研修や生徒への進路面談、外部人材の活用など、指導方法の研鑽と共有が必要である。	高い「志」の育成と進路実現	①生徒の「志」を高めるため、進路指導部による計画的なキャリア教育を実施し、多様な外部人材を活用する。 ②自主学習を習慣化し、時間管理の意識を高めるため、朝学習への開始時間からの参加を促す。 ③学習の定着力を高めるため、補習(前期・長期休業・後期)を開設し、積極的な参加を呼びかける。 ④大学受験に対応した学びを一層深めるため、スタディサプリを活用する。 ⑤保護者と協力して生徒の大学進学を支援するため、保護者に対して最新の進路情報を発信する。 ⑥生徒の進路選択、進路実現を図るため、担任による二者・三者面談、校長面談を実施し、適切な助言を行う。	①外部講師や卒業生からの話により自身の進路選択に役立った3年生は8割以上である。 ②朝学習に開始時間から参加した生徒は全学年8割以上である。 ③年間40講座以上の進学補習の開講し、3年生の進学補習参加状況は2割以上である。 ④3年生のスタディサプリの利用状況は毎月1,000時間以上である。 ⑤学校からの進路情報の提供が役立ったと感じる3年生保護者は7割以上である。 ⑥面談や面接指導が自身の進路選択に役立ったと感じる3年生は8割以上である。	※以下、生徒は全1,2年生537名回答、保護者は全学年492名回答 ①外部講師の話が役立ったと答えた生徒は81%で、進路選択に活かした。 ②朝学習に取り組んだ生徒は89%であり、自学自習を進めている。 ③進学補習に参加した1,2年生の生徒は36%であった。 ④スタディサプリ活用率は50%、3年生は月1,000時間を越えた。 ⑤学校からの進路情報が役立ったと感じた保護者は72%であった。 ⑥面談や面接指導が役立ったと答えた生徒は75%であった。	B	(課題) 新課程入試に対する情報共有、小論文指導や面接指導の組織的対応、英検等の資格取得の推進 (改善策) 入試結果や3年生の入試指導に関する教職員の情報共有と振り返り、小論文指導や面接指導の計画的実施、総合型選抜に関する研修、学年生徒全員の英検受験の実施	・朝早くからの登校や自習室及び教室の活用など自学自習の取組が進み、生徒自ら勉強する雰囲気がつくられている。 ・学校からの進路情報が役立ったと回答している保護者が高い。引き続き、進路選択が年々複雑化しているため保護者への適宜な情報提供を行うことが大切である。 ・自分の進路を自分事として捉える働きかけを早い時期から行い、スタディサプリや進学補習への参加につなげてほしい。	
2	<現状> ○学校説明会の参加者は3,000名を越え、多くの方が来校した。志願倍率は普通科1.39倍、理数科2.15倍となり、学校選択問題実施以降、高い倍率となった。 ○昨年度、HP更新回数は214回を越え、中学生やその保護者に最新の学校情報を提供した。 ○新学習指導要領実施3年目となり、各教科におけるの評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法について、指導と評価の一体化を目指し、研究を進めている。 ○海外生徒を12名受け入れたり、外国生徒と交流した本校生徒は380名を越えたりして海外交流を積極的に推進している。 <課題> ○物価高の影響を受け、海外との交流事業について安価かつ効果的なプログラムになるよう現地スタッフとの連絡・調整を行う必要がある。 ○全体・個人のwell-beingにつながることを目指し、教職員の仕事のやりがいと負担軽減のバランスをどこに定めるか課題となっている。また、担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る必要がある。	開かれた学校づくり	①本校の教育活動への理解・協力を地域の皆さんに促すため、HP等を活用して学校の情報を発信する。 ②受験生やその保護者が本校の教育活動への理解を促すため、学校説明会の内容を充実させ、本校への進路希望者を増やす。 ③外部から見た本校への評価・期待値を把握するため、学校運営協議会等を実施し、指導・助言内容を踏まえ、改善を図り、改善内容を保護者へ周知する。	①学校HPがよく更新されていると感じる生徒、保護者は7割以上である。 ②本校の教育活動への理解が深まったと感じた学校説明会参加者は8割以上である。 ③学校運営協議会等での意見などが本校の教育活動の改善につながっていると感じる保護者が5割以上である。	①学校HPがよく更新されていると答えた割合は生徒76%、保護者85%であった。 ②振り返りのアンケートから学校理解が深まった参加者は多い。 ③学校運営協議会の内容が共有されていると感じる保護者は78%であった。	A	(課題) 海外連携校との共同研究の実施方法、継続的な連絡及び連携づくり、生徒課題研究を活用した総合型選抜への対応 (改善策) 教務部、SSH推進部、進路指導部による分掌を越えた情報共有及び組織の構築 (課題) 学習環境の一層の整備、教職員の働く環境の整備 (改善策) 本館5Fの活用、英語科教員室の移動、グローバルルームの新設	・経験年数の若い教員が保護者などの話などで委縮しないよう、保護者への情報公開をより行い、ケーススタディを通して学びを推進してほしい。また、教職員の横連携で気楽に話せる雰囲気を一層醸成することが大切である。 ・海外に行って楽しく終わればよいというわけではない。生徒が次の学びに対する意欲・態度に結び付けていく工夫が必要である。 ・学校施設に関する整備については引き続き適切な修繕を行い、学習環境を整えてほしい。特に、あまり使われていない場所があるならば積極的に活用し、生徒の学びを一層促すことが重要である。	
3	<現状> ○「自主・自律・創造」の校訓を意識して、多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○タブレット端末を利用した効率的・効果的な指導方法を研究し、アクティブラーニングを推進している。 ○体育祭や文化祭などの学校行事で、生徒が生き生きと楽しんで活動している。 <課題> ○自転車事故件数を減らすこと、自転車ヘルメット着用率を今より高める必要がある。 ○教育相談が必要な初期の段階で、専門家と相談できる体制づくりを今より強固にする必要がある。 ○学校生活の中で生徒が主体的に判断し、自信をもって行動できるような活動をもっと増やす必要がある。	安心安全な高校生活	①生徒が安全に登下校するため、自転車利用時のヘルメット着用やイヤホン未使用を呼びかける。 ②教職員の教育相談や特別支援に関する理解を深めるため、研修や情報交換を実施する。 ③ネットモラルの向上を図るため、インターネット安全教室の実施、ネットモラルの情報提供を行う。	①自転車利用の際のヘルメット着用、イヤホン未使用の生徒は5割以上である。 ②教育相談や特別支援に関する学びがより深まったと感じる教職員は8割以上である。 ③ネットモラルを意識してスマホやタブレットを利用している生徒は8割以上である。	①台湾、フランスから留学生2名を受け入れた。 ②ホームステイを実施し、インドから15世帯で25名を受け入れた。 ③ユネスコスクールに登録され、世界の国々との交流の拡大を図った。 ④韓国の水原市の三一工業高校と姉妹校を締結した。	B	(課題) ヘルメット着用率や自転車運転時のイヤホン未着用率の向上 (改善策) 生徒同士の呼びかけ、事故事例の紹介による注意喚起 (課題) 教育相談や生徒指導、教職員事故防止に関する研修の内容、実施方法 (改善策) 外部講師の活用、具体的な事例研修の活用	・イヤホン着用での自転車運転は加害になるケースも考えられる。事故が起きてからでは遅いのより徹しく継続的に指導してほしい。保護者は子どもが安全に登下校し、学校生活を楽しんでほしいと願っている。 ・大学は研究の場であり、高校までに人格教育をしっかりやることは大切である。 ・部活動は異学年との関係性を作っていく場である。部活動を辞めてもSNSやオンラインで過ごしてしまう生徒もいるのはもったいない。部活動の魅力化・特色化を一層推進してほしい。	
4	<現状> ○第II期SSHは3年目、科学技術人材育成重点枠は2年目を迎える。 ○STEAMS Time Iは教員17名、IIは教員20名が担当し、生徒は計89本の研究発表を行った。第I期SSHと比較して課題研究の深さや広さ、対応教員の教科・科目が広がっている。また、理化学研究所やKEK、Spring8など、専門的な機関で実験活動や講義を受講している。 ○国内F.Wに208名、海外F.Wに68名参加し、学校外での学びを推進している。また、福島復興学は福島県内6自治体と連携して、生徒34名がふたば未来学園や安積高校と交流した。 ○海外オンライン交流を10回行い、計488名が参加した。本校の特徴的なプログラムとして「PROP23のオンラインプログラム」は4カ国9校114名が参加した。また、「GC4S」は126名が参加した。 ○アウトリーチプログラムに小中学生が計147名参加し、近隣の児童が多く参加して小中高の連携を強固にしている。 <課題> ○さいたま市独自の「STEAMS TIME」について、12年間のつながり意識し、系統性、発展性を目指した授業を研究する。 ○海外の現地校とのお互いにとって充実したプログラムとなるよう、体験プログラムや事前研修の計画を立て継続的に実践する必要がある。	探究的な学びの推進	①課題研究を発展、深化させるため、STEAMS Time II IIIを複数教科の教員や大学教員が指導・助言することで、生徒の探究的な学びを推進する。 ②福島県の街の復興を応援するため、昨年度から継続して2年生全員が「HAMADOORI REBORN」を実施する。 ③社会とつながる学びを推進するため、多様なフィールドワークを実施する。	①課題研究を通して生徒自身の学びを充実させることができた生徒は6割以上である。 ②福島復興学を通して福島県や日本の現状について理解を深めることができた生徒は6割以上である。 ③フィールドワークに参加した生徒は延べ250名以上である。	①学校行事で充実感・達成感を得るため、生徒が主体的・自主的に行事の運営、活動を行う。 ②生徒の生き生きとした活動を見てもらうため、学校行事の地域公開を推進する。	①照明LED化、床の修繕等により学習環境が整備されていると感じる生徒は6割以上である。 ②自転車利用の際のヘルメット着用、イヤホン未使用の生徒は5割以上である。 ③教育相談や特別支援に関する学びがより深まったと感じる教職員は8割以上である。 ④ネットモラルを意識してスマホやタブレットを利用している生徒は8割以上である。	A	(課題) 課題研究への取り組み方の指導方法、外部機関との連携、海外研修等の経験後の自学自習へのつながり、小中高12年間を見通したアウトリーチプログラム (改善策) 教務部、SSH推進部、進路指導部による分掌を越えた協力体制の構築、学校全体の取組、外部機関の専門家からの指導・助言の推進、先進校への視察、アウトリーチプログラムの組織化と効率化、海外研修と日々の学習との相互作用の研修と研究	・SSHプログラムにおいて教育的配慮だけでなく科学の内容を深く学び、記録に残すなどを充実してはどうか。例えば、海外研修での経験や英語で記録に残し、保護者にも共有する。先生が一生懸命で生徒が無関心ではいけない。また、経験や記録等を活かして総合型選抜入試にも活かしてほしい。 ・宮原地区にある小中高の連携が大変活発に行われている。地元の小・中学生が科学に関心を示したり、中学生のボランティア参加を見たりして、地域と学校が一体となった教育活動を行っているのはうれしい。 ・数値目標と数値結果の記載があつて分かりやすい。次は経年変化を見て比較・検討するとよい。